

すれ違う権力のまなざしと ストリートのまなざし

路上で社会を生きる野宿者たち ——男と女

闘争空間としてのストリート

シェルターを拒否するホームレスの日・米・英比較研究

トム・ギル

明治学院大学国際学部

この論文集のなかで関根が指摘するように、ストリートは闘争の空間である。それはその時々
のコンテキストによって様々な形態をとるが、本論文は文字通り路上をめぐる闘争について論じ
る。すなわち、都市環境においてホームレスの人々とその他の当事者——社会の主流をなす人々
と都市当局——との間に起こる争いである。日本、米国、英国での事例研究に基づき、21世紀の
工業都市において、路上やその他の公共空間で暮らすという難題に対する個人や集団の反応をこ
こでは検討している。ホームレスの人々は現代の都市社会の受動的被害者であるとしばしば表現
されるが、現実には、彼らは自治体と頻繁にやりとりするなかで、しぶしぶ調停に応じることも
あれば、積極的に抵抗することもあり、その戦術は実に多彩と言えるのである。

はじめに——シェルターを拒否して

1 積極的抵抗——ホトケ

2 消極的抵抗——ツジモト

3 社会に対する非難——ヨシダ

4 ロサンゼルスにおける路上活動
——デイビッド

5 リバプールの空爆教会での生活
——マーク

6 日本のホームレス居住地
——空間をめぐる集団闘争

7 日本と米国の排除事例

8 結論

キーワード：路上、ホームレス、野宿、テント村、抵抗、日本

はじめに——シェルターを拒否して

本論文では、この論集の冒頭で関根が提案したように、ストリートを闘争空間に見立て、この空間をめぐる争いが都市のホームレスと、彼らが共存する地域社会および当局との間でどう展開されるかについて、主に日本、そして英国や米国の事例をもとに考察する。ホームレスの権利や義務をめぐる闘いは、路上での闘争の中でも最も劇的な形態をとる。それはホームレスが、路上などの公共空間を近代都市の他の空間をつなぐ通路としてではなく、住む場所として利用する人々であることに起因する。しかし同時に、双方とも「ホームレスは路上を離れるべきだ」という主張を同じくしている点で、これは興味深くもつかみどころのない闘争となっている。ホームレスの人々は適切な住居に住みたいと考えているし、地方自治体も、誠意の程度は様々だが、それと同じことを望んでいると思われる。にもかかわらず、ホームレスが公共空間に居住する権利を守ろうとすると、彼らは非論理的あるいは非合理的だと言われがちである。しかしそれが本当にそうなのか否かは、彼らにどのような選択肢が与えられているかによって変わるものである。

人々が「路上生活を選択する」のは、他のライフスタイルよりもそれが好ましいと思っているからではない。彼らの多くにとって、他の様々な魅力のない選択肢と比べればそれが一番ましだからである。彼らは、所持品が盗まれたり身体的な脅威にさらされたりする可能性のある混雑したシェルターでの生活よりも、路上生活のほうがよいと考えるようになったのかもしれない。彼らの存在を疎んじる家族と暮らすよりも路上のほうがましだと考える場合がある。特に暑い気候の地では、小さな風通しの悪い部屋で暮らすよりも路上生活の方が良いと感じる場合がある。要するにある状況の下では、路上での生活が、合理的な選択の上での意思決定の結果だといえるのである。

妻木は、ある論文（2003年；英語版は2004年）の中で、シェルターに入ることを拒否するホームレスに対する日本の自治体の態度をすどく問題化している。すなわち、当局はこれを「社会生活の拒否」と見なす。2002年のホームレス自立支援法の下では、シェルターを拒否するホームレスは、他の2つのホームレスのグループ——働く意思と能力がある人々と、高齢あるいは虚弱なため働くことのできない人々——とは対照的に扱われている。他の2つのグループのニーズは法律で対処できるが、シェルターに入ることを拒否する人々は、妻木の言葉によれば「矯正／排除」（妻木 2003: 21）の対象となる。「良いホームレス」と「悪いホームレス」を区別しようとするこの日本の自治体の試みは、広く世界中で見られるパターンを踏襲するものである。たとえば、英国の「正直な貧困者（honest poor）」と「頑固な物乞い（sturdy beggars）」の区別は、中世にまでさかのぼる。一方米国では、シェルターの利用を拒否するホームレスの人々は「サービスへの抵抗者（service resistant）」と表現される。

このお役所的な言葉の前提となっているのは、シェルターを拒否する人々は不合理な行動をしているという認識である。しかし、政府の役人たちは、他の可能性を軽視する傾向がある。つまり、シェルターの利用を拒む人々ではなく、その施設自体に問題がある可能性に考えが及ばないのである。妻木が指摘するように、今日の日本のホームレス政策には多くのアイロニーがあるが、自立支援を強調する現行の制度が、ホームレスを路上から引き離してシェルター（一時避難所）あるいは自立支援センターに一定期間収容した挙句、生活保護の受給者にしてしまいがちなのは、まさに皮肉なことである。実際、かなり自立して暮らしていた男性（彼らは自分自身の住居を作り、アルミ缶リサイクルなどのある種の経済活動を行うことで自立している）が、より一般的な住居に住めるようになるのと引き換えに、政府からの生活保護の支給金に全面的に依存する結果になることが多い。妻木の言うように、「『福祉による自立』は、自給自足の価値を放棄することになるため、全く自立と呼べるような類のものではない」（妻木 2004: 27）。「自立」に関する行政側の議論に潜むアイロニーについては、以下の第7項でさらに詳しく述べる。

本稿では、自ら望めば恐らく路上生活を抜け出すことが可能だが、さまざま理由でホームレスの生活を続けている数名の男性の事例について考察する。筆者の事例研究は主に日本のものだが、英国と米国からの事例もそれぞれ1つずつ考察に加える。後半は個人から集団に話題を移し、ホームレスの野宿地におけるスペース争いについても見ていく。なお、事例中の個人名については敬称を略させていただくものとする。

1 積極的抵抗——ホトケ

名古屋にはかなり有名なホームレスで、自称「ホトケ」という男がいる。誰にも自分の本名を呼ばせないのがホトケの主義である。年齢や出生地を尋ねられれば、彼は「ゼロ歳、地球の生まれ」と答える。なぜホトケが自身のアイデンティティをそれほど隠そうとするのかは分からないが、彼の若い頃に忘れてしまいたいような出来事があったかもしれない（写真1参照）。

私が最初にホトケに出会ったのは2002年、新しい法律が制定された年である。当時、名古屋中心部の3つの大きな公園——若宮大通公園、白川公園、久屋公園——には、ホームレスの男性が千人近く住んでいた。ホトケはテントのような雨よけのついた大きな小屋に住んでおり、多数の家具や、がらくたや本を持っていた。名古屋市当局はホームレスのためのシェルターを若宮大通公園に建設中で、市の職員は公園内の住居を巡回し、その主たちにシェルターが開設されたらそこへ移るよう説得しようとしていた⁴。ホトケは断固としてこれを拒否し、他のホームレスたちのほとんども同じようにするだろうと予言した。しかし市当局は、移動を拒む者には罰金や投獄の処罰を与えるという

根拠のない脅しも織り交ぜながら2年におよぶ交渉活動を行い、その結果、若宮大通公園に残るホームレスの数はホトケを含めてわずか8名となった。2005年1月25日、市当局と警察は、最後まで抵抗を続けるホトケたちを強制的に立ち退かせようと、同公園にやってきた。すでに解体され撤去された住居から引きずり出されても、ホトケはまだ公園から出ることを拒否した。8名のうち6名がシェルターに、障害を持つ1名は病院に入った。しかしホトケは、樹木を利用して住処とし、警察の倉庫から自分の所有物を3つだけ取り戻し、白川公園に住み続けた。

彼の抵抗のワンマンショーは、その年の6月3日まで続いた。その日、ホトケが朝食を作っていると、2人の市職員がそれを遮り、公園を出ていくよう説得しようとした。同じことが前から何回もあったせいか、彼は苛立ち、味噌汁を市職員たちにかけた。短いもみ合いがあり、目に見えるようなケガはさせなかったにもかかわらず、ホトケは2人の市職員に暴行したとして逮捕された。名古屋地方裁判所での裁判でも、ホトケは例の如く、本名、年齢、出生地を明かすことを拒否した。結果的に彼は保釈を認められず、裁判期間中17ヶ月にもわたってずっと拘留され続けた。その間、ホトケ自身の話によると、拘置所の条件が悪いと絶え間なく文句を言い、知事に会わせろと要求するなどして、彼を逮捕した相手を苦しめたという。最終的に彼は暴行・傷害罪で有罪となり、最高刑となる罰金30万円の支払いを宣告された。この罰金は1日につき5千円の割合で刑期に換算された。つまり合計で2カ月の刑期となるわけだが、ホトケはすでにそれよりはるかに長い期間拘留されていたので、結局彼はそのまま釈放されることになった。

その後、ホトケは名古屋高等裁判所に控訴した。2007年9月、裁判官は彼の暴行罪は認めたが、傷害罪は却下し、罰金を30万円から20万円に減額した。これら2つの裁判劇は、ホトケの友人や支持者らで満席になった傍聴席の前で展開された。

最初の裁判で釈放された後、ホトケは活動家や地元の日雇い労働者組合が所有する笹島労働者会館の4階の1室で1ヵ月ほど休息をとった。それから彼は現在の住居である、若宮大通公園²の小さな小屋に移った。この小屋は彼が自分で建てたものではなく、マキグチという、名古屋のホームレスの間では「小屋の家主」として知られている人物から借り受けたものだった。ホトケによると、もとは釜ヶ崎出身のマキグチは、若宮大通公園に約30軒の小屋を建てており、そのうち20軒がまだ現存しているという。それらの小屋は小さいが頑強な住居であり、下部に車輪をつけた独創的な設計になっている。つまり、警察や市の職員から移動するよう長期間要求され続けた場合、その家主は若宮大通公園の中で小屋を少し動かすことで、申しわけ程度にそれに従って見せることができるのである。この工夫とあわせて、マキグチは市役所内に慎重に知り合いをつくることにより、その車輪付きの小屋のまわりに、安易に踏み込めないある種の道義的な力の領域を巧みに作り上げた。彼のアプローチは、立ち退きを求める当局の圧力に対応する際の、みじめな服従かあるいは不屈の抵抗かという両極の中間に位置する選択肢として

興味深いケースである（写真2参照）。

きわめて頑固なホトケは、仲間たちのほとんどが屈服してしまった後も、長い間1人で当局との「聖戦」を戦っていた。しかし、彼は完全に独立独行していたのではない。日雇い労働者の組合やホームレス用の車輪つきの家を世話してくれたマキグチなどを頼りにしているし、少なくとも僧侶1人を含む支援者たちからのカンパも受けながら運動を継続している。病気になると、ホトケは時々病院へ行くが、その治療費は生活保護プログラムの医療部門が負担する。したがって、このように強烈な個人的抵抗を表明することが可能なのは、一部には、何らかの形の援助を受けようとする現実的な気持ちがあるからなのである。

2 消極的抵抗——ツジモト

次の事例は、日本の河川敷に見受けられるにわか仕立ての住居群の1つについてである。川岸での暮らしは、平和と静けさを求めるホームレスの人々には魅力的である。公園のコミュニティに住む場合よりも、住居が撤去されたり、警察や市の職員に悩まされたりする可能性はずっと低い。河川敷は都市公園より通行人の数も少なく、しかも行政機構が複雑になっている。その管理は市、県、国の様々な部門で分担されているため、行政機構が麻痺した状態になり、ホームレスの居留地は看過されやすくなるのである。ただその一方で、河川敷には洪水の危険がある³⁾。また、河川敷を平和な場所にして人通りの少なさと行政的な放置という環境条件は、ひとたびホームレス同士の喧嘩が起こったり、若いならず者の集団が襲ってきたりしたときには、その危険を増幅させる原因になってしまう（写真3参照）。

ツジモトは、1944年に埼玉県で生まれ、私が彼と2007年に知り合ったときには63歳だった。彼は何年も日本中を転々とした後、10年ほど前から武庫川の河川敷に住んでいた。ツジモトは骨細の痩せた体つきで眼鏡をかけており、多くの皺がきざまれた顔は笑うとさらに皺くちやになる。彼は人が不用意に捨てたものを拾い集める「地見屋」（文字通り、地面を見ることを生業とする職業）であり、家庭ごみの中から宝石や陶磁器などの貴重品を見つけたり、電気製品を修理したりすることでかなりの成功をおさめてきた。彼は、毎月の粗大ごみの収集日になると近隣を歩き回り、鋭い目で貴金属の刻印やその他価値あるものの印を見分ける。彼は最近、18Kの金ネックレスを見つけ、それを定期的にホームレスの集落へやってくる廃物商に8万円で売ったという。とはいえ、彼の普段の月収は平均してざっと1万5千円から2万円にしかならない。

ツジモトは技術者の資格をいくつか持っており、電気技師や様々な建設機械のオペレーターとして働くことができる。また、珠算検定二級や、華道（桂古流）と茶道（裏千家）の免状も持っていると言う。彼のきちんと整頓された小屋は、どこか茶室を思い起

こさせるものがあり、訪問者と話すときは、その人の正面に正坐する。彼にはその方が快適なのだそうである。彼は、歴史小説を読んだり、友人と将棋をさしたりゲームボーイでゲームをしたりして趣味の時間を楽しむ。小さなテレビも持っているし、彼の友人は時々、車のバッテリーを充電してくれる。照明用の石油ランプや料理に使うキャンプ用のガスも持っている。また、彼は時々釣りに行く。武庫川には釣るものがないといいながらも、自転車に乗ってかなり遠方まで足を伸ばす。

すぐ近くには約10人の男性が暮らしており、彼らとは非常にうまくやっているが、ただ食べ物を分け合うことだけはしないとツジモトは言う。それは彼にとって、人間関係が過度に親密になりすぎることを象徴的に示す。ホームレスの作家、大山史朗（大山2000; 2005）を始め、多くのホームレス男性と同様に、ツジモトも人と親密になりすぎることでもたらされる心理的拘束を嫌って、それを意図的に避けている。

ツジモトはルンペン・プロレタリアートとは程遠い仕事のキャリアを持っていた。7人兄弟の末っ子である彼は、高校を卒業後、印刷機のメンテナンスと修理の会社に就職した。この専門的な仕事のため、頻繁に出張することになったが、彼の放浪癖はこれに由来しているらしい。5年間働いた後、彼は仕事を辞め、その後は職を転々とした。電気技師の資格を持っているため、名前を貸すだけで良い収入を得ることもできた。事実、彼は指一本動かさなくとも、メンテナンス会社に、「どうせ壊れることはない」変電所の安全証書に自分の名前を記載することを許可するだけで、1万円稼ぐことができたのである。

ツジモトは、職を得ることはとても簡単だと言う。採用担当者が彼に話を持ちかけてきたことも何度かある。しかし、メルヴィルの短編「バトルビー」の主人公よろしく、ツジモトはその話を受けたがらない。「仕事がやりたければできる。でもやる気はない。気を使うこと、上下関係などに疲れた。ここに来たら、気が楽」。私との会話の中で、ツジモトは自分のことを「癒け者」と楽しげに表現した。しかし、彼はこれまで生活保護の申し込みをしたことはないし、今後も決してしないと強調した。その理由を尋ねたら、彼は「もう、生きていたくない」と答え、3回自殺を図ったことを付け加えた。だから、生活保護を受けたいとも思わないし、受ける必要もなかった。彼が年老いて体も弱ってきたのを見て、地域のボランティアが生活保護を申請するように勧めたが、彼は「アパートに入るくらいならすぐに川に入る」と答えた。「あるいはこの木で首をつるか」。彼は生きることに疲れており、惰性で生きていただけだと言った。しかし、そんな話をしながら彼は楽しげに笑っていたから、彼がどの程度自殺について本気で話していたかは推し量れなかった。ツジモトはまた、近くの大阪にある自立支援センターを利用することにも関心を持っていなかった。彼は政治家を軽蔑しており、彼らによってつくられた施設はどれも信用していなかった。

ツジモトを見ていると、彼を日本のソロー——半農業地域に隠遁し、自分を取り巻

く世の中を白眼視しながら社会からの孤立を続けた——だと考えてみたくなる。しかし、あまり強引になぞらえるのも良くないかもしれない。ツジモトは自立にはとりたてて関心を持たず、作物を栽培したり野生の果物を摘んだりするよりも、屑拾いをして収入を得て、スーパーで食品を買うことのほうを好んでいる。実際、ホームレスの人々が野菜の栽培や鶏の飼育をするのは、多くの地域において法的な障壁のために困難であることは確かだ。そういった事例はほとんど見られなかった。大半のホームレスは、自立している場合でも、それは貨幣経済からの離脱にまでは至っていないのである⁹。

3 社会に対する非難——ヨシダ

名古屋で最大の河川敷ホームレス居住地は、庄内川沿いに分布している。名古屋側には小屋の小集団が違ち並び、そのほとんどが川沿いの色々な橋の下にある。川の向こう岸は菖目寺町の管轄で、広大な沖積平野になっており、そこに大きなホームレス居住地が、地元の市民農園と隣接して存在している。菖目寺町側のホームレスは、市民農園の耕作者との関係が非常に良く、作物の見張りの手伝いをしたり、そのかわりに新鮮な農作物をもらったりしているそうである。しかし、私がヨシダと出会ったのは名古屋側の河川敷だった。彼の住む小さな小屋は新太鼓橋の下の歩道の近くにあり、そこから20メートルほど離れた歩道の向こう側には、悪臭を放つ巨大なごみの山に囲まれた小屋がさらに4つあった。そのうち少なくとも2つの小屋には明らかに人が住んでおらず、すっかりごみが入り込んでいて、壁はたわみ、隙間からごみのはみ出していた(写真4参照)。

ヨシダは40歳くらいに見えた。体格はがっしりしていて太り気味であり、ほさほさの顎髭を生やし髪は黒く縮れていて、黒い短パンと汗で黒ずんだグレーのTシャツを着ていた。最初は私を警戒していたが、だんだんと饒舌になってきて、2人で何時間も会話を続けるようになった。彼は私に、道の向こう側にある悪臭を放つごみの山は、そこからよそへ移っていったあるホームレス男性の遺産であることを教えてくれた。その男性は、地元の主婦たちに人気があった。彼女たちが持ってきてくれる家庭ごみを吟味して、売れるものを選び出し、残ったものを捨てていたが、成長し続けるごみの山のごとは気にしていないようだった。彼は臆病で、男子生徒の集団が彼をいじめにやってくると、ヨシダに頼って身を守ってもらっていた。ついにごみの山が大きくなりすぎて耐えられなくなり、ヨシダと彼の友人数名は、その男性に立ち去るよう求めたのである。その後、地方自治体はごみを除去すると何度も言ったが、それはまだ実行されていなかった。ヨシダに言わせれば、それは日本の行政のまったくの無能ぶりと人を馬鹿にした虚偽の最たるものだった。

ツジモトは河川敷から厭世的な視点で社会を見ていたが、ヨシダの視点はもっと暗く冷笑的である。ヨシダは「日本はもう終わりだ」と何度も繰り返し、様々な陰謀説を唱

えた。例えば、国が運営する賭博はすべて八百長だとか、金儲けの天才で億万長者の「ホリエモン」（堀江貴文ライブドア社元社長）が2006年1月18日に逮捕されたのには裏があるといったことである。彼によればホリエモンの逮捕は、その1ヵ月前に発覚したもっと深刻な「姉齒スキャンダル」、つまり姉齒秀次建築士による構造計算書の偽装により、耐震基準を下回るマンションが数多く建設されていた事件から国民の目をそらすためであるという。それぞれの陰謀説を語るたび、彼は眉をすりあげ肩をすぼめて、いかにも世の中のからくりを知ってうんざりしたという様子で、「そうでしょ?」と言った。彼曰く、日本は金持ちによる、金持ちのための社会であり、完全に腐敗していて非常に不公平な社会であることは明白である。ホームレスの人々を支援する政府の政策は見せかけで、生活保護費の受給者の数を増やさないための単なる言い訳だ。1ヵ月約7万円の国民年金は、老人にあきらめて死ねというようなものだ。主流の宗教は金もうけのための詐欺で、弱者や貧困者を救うことには関心がない。ほとんどの場合、食料の無料支給をしているのは日本のわずかなキリスト教徒のそのまた少数派であるという事実は、仏教の寺院に己の恥を知らしめる事実だ。以上はヨシダの現代日本論であった。

「この国には頼りになる人は1人もいない。自分で生きるしかない。」

ヨシダにとって、それは彼の周りにあるものは何でも利用することを意味した。缶などを拾い集め、食糧をあさることでもあった。しばらくの間、地元のマクドナルドは、すばらしい食料供給源であった。マネージャーが提供してくれる売れ残りを、毎晩ホームレスがもらっていた。その分配をめぐるけんかが起こらなければ何も問題はなかった。しかし今では、地方条例が変更になったため、マネージャーは高い金を払って業者に売れ残り商品の引き取りと廃棄を依頼しなければならなくなっている。これと同じような話は日本の他の地域でも聞くことができる。ホームレスがこのようにして食糧を得ようとする行為は、次第に犯罪として扱われるようになってきているのである。それは、ホームレスの住居の公園からの段階的な撤去、缶の収集の犯罪化、その前から行われている駅や電車で拾った雑誌の販売に対する取り締まりなどと並んで、ホームレスの人々による自立的活動を非合法化しようとする政府の着実な動きの一貫としてとらえることができよう。

ヨシダにとって、食糧をあさることと生活保護を求めることとは、全く別のことであることに留意されたい。一見したところでは、これら2つの活動はどちらも、自活できないことを認めることだと思われるかもしれない。しかし、ヨシダにとっては、レストランや店舗が廃棄した食べ物を集めることは、狩猟や食糧採集と同じである——それには努力や、その土地に関する知識が必要であり、国家への依存を伴わない。むしろ、山ほどの食糧を毎日廃棄することこそ、国家にとって恥の上塗りである。

ヨシダはかつて、近くの豊田市にあるトヨタ自動車に部品を供給している多くの自動車部品メーカーの1つで働いていた。5年ほど前、彼は突然解雇された。それは春のゴー

ルデン・ウィーク直前のことだった。低い賃金やらパチンコに興じたことやで、彼はその状況をしのぐための貯金がなかった。結局、地元の公園で夜を過ごすことになり、親切な年配の男性によって助けられた。その男性には軽度の知的障害があったが、彼はヨシダにホームレスとして生きていく方法を教えた。ヨシダにとってこの老人は命の恩人だった。ヨシダは他のホームレスの人々に、シェルターや自立支援センターといった社会福祉サービスについて助言を与えていた。しかし、彼自身はそれらのサービスを申請したことはなかった。彼の命を救ってくれた老人の面影を見たかったからだと言った。

その後、老人は病気になり、病院に収容されて、退院の日に生活保護の認定を受けた。しかし、それはまたしてもゴールデン・ウィークの直前のことであり、病院は福祉事務所が閉まっている時に彼を退院させたのである。老人はほとんど歩くことができなかったが、ホームレスのシェルターまで自力で行き、そこで連休が終わって福祉アパートに入れてもらえるまで滞在するようと言われた。ヨシダはよろよろと歩く老人を助けてシェルターまで連れて行き、彼をそこに残した。3日後、ヨシダがそこを再び訪れた時、老人はいなくなっていた。老人の靴が置いてあったので、老人は裸足でシェルターを出て行ったようだ。それ以来、ヨシダは老人の姿を見ていない。ヨシダは福祉当局を非難した。誰かを生活保護の受給者リストに載せる際、本人が本当に金融資産を所持しないこと、そしてそれを提供する人物が誰もいないことを確認するために、福祉事務所は長々と身元調査をする。後者の調査は、親兄弟や子供に始まり、非常に遠い親戚や、場合によっては親族でない友人にまで対象を拡大して提供者がいなかろうかを調べるのである。そのような電話をかけられる恥ずかしさは、人々が生活保護の申請を思いとどまる大きな要因となっており、ヨシダは老人が自分の元を離れていったのもそのせいだと考えている。老人の安否を、ヨシダは今も気にかけている。

ヨシダは、地元の男子生徒がしばしばやってきては、面白半分にはホームレスたちに石を投げつけるのだということも語ってくれた。これに抵抗することは極めて重要であり、ヨシダはいつも抵抗していた。その子どもたちは皆、根は小心だった。彼は男子生徒の自転車を蹴とばしたり、彼らを無理やり歩かせて地元の交番へ連れて行き、彼らの親に会わせると強要したりした。ヨシダはかつて、ある生徒を両親の前で、鼻血が出るほど強く平手打ちにしたことがある。毎年夏休みが始まる前、彼は警察に要請して、地元の学校に向けて児童生徒にホームレスたちを攻撃しないように命ずるチラシを発行させている。(こういった話はいずれも本人に聞いたもので、その真実の裏付けはできていない。)

ヨシダを苛立たせている原因の1つは、社会において公平なチャンスを与えられてこなかったという気持ちである。貧しい家族の6人兄弟の1人である彼は、中学までしか学校に行っていない。両親が彼を高校に行かせる余裕がなかったからである。彼はその

ことを後悔し、何とかして教育の遅れを取り戻し、ホームレスから脱皮したいという考えを表現している。

私の目にはヨシダは、明らかに不安を抱えているが、そのシニカルで闘争的な態度でそれを覆い隠している人間のように映った。自己依存と自己防衛が常に彼の心にこびりついていて、ヨシダはまたホームレスの人々の相互援助を、危険な世界で安全を守るための方法であると見てもいた。実際彼にも仲の良い友人はいた。その友人はかつて郵便配達をしていた人で、ごみの山の近くにある小屋の1つに住んでいた。先ほど言ったように、ヨシダ自身は福祉事務所に行くことを拒否していたが、世話好きということで何度か他のホームレスたちには福祉事務所へ行くように言ったことがあると述べた。だが彼と話した結果、地元の自立支援センターについて彼には驚くほどわずかな知識しかなかったことが判明した。私はその2日前に同センターを訪問したのだが、彼はその施設についての私の説明に関心を持ったようだった。恐らく彼のシェルターへの抵抗は、必ずしも絶対的・永久的なものではないだろう。

4 ロサンゼルスにおける路上活動——デイビッド

デイビッドは50歳くらいの長身の白人である。以前はふさふさしていた金髪が、今では白髪になっている。彼はロサンゼルス様の様々な場所で15年間、ホームレス生活をしていた。その間スラム街にいたこともあるが、大半はベニス・ビーチとサンタモニカ地区で過ごした(写真5参照)。

1994年、デイビッドは家業の商売に失敗して仕事を失った。彼はたくさんの仕事に応募したが、どこにも採用されず、金がなくなった。彼はロサンゼルス南部にあるオレンジ郡に住んでいた。最後の頼みの綱として、ファスト・フードのレストラン、「ジャック・イン・ザ・ボックス」に応募したが、そこでも採用してもらえなかった。その時、彼は路上かシェルターで夜を過ごさねばならなくなることを覚悟した。警察に電話をして、自分がホームレスであることを告げたが、どのシェルターも満員だと言われた。郡政府も、デイビッドに安いホテルの宿泊券を発行するどころか、隣の郡へ行くバスのチケットを用意することさえできないと言った。揚句の果てに、オレンジ郡では歩道で寝るのは法律違反であると念を押されて、彼はどうしていいものか途方に迷ってしまった。

デイビッドはそれまでホームレスだったことはなく、その夜はとにかくねぐらを確保しなければならなかったため、拘置所に行ってもいいと考えた。そこで彼はレストランの「アニーズ」へ行き、支払う金がないのを承知で食事を注文した——そんなことをするのは彼の生涯で初めてだった。店のマネージャーは警察を呼んだが、警察は彼の逮捕を拒否した。次に彼はショッピングカートをつかんで、それを銀行の窓口に向かって

だ。ついに、彼は市の拘置所に入れられ、食事を与えられ、その夜眠るための毛布やマットも得ることができた。デイビッドはこの行為のために3ヶ月拘置所に入っていた。そして拘置所を出る時には、入所時よりもはるかに政治的な関心を深めていた。それ以来、彼はロサンゼルス地区で、ホームレスの権利を確立・擁護するために、一連の法廷闘争を闘ってきた。

「その後、私は少なくとも12回は逮捕されました。公営の商店街で公衆電話を使う権利をめぐる陪審裁判を受けたし、人通りのない寂れた歩道に座ってマフィンを食べる権利や、私が1年以上も寝るときに身につけていた「宿無し」と書かれたネックレスを外せと強要されずにゲティ美術館を歩き回る権利をめぐる民事訴訟も経験しました。ACLU（全米自由人権協会）の裁判では、中心的なスポークスマンとして八人の仲間たちとともに、ホームレスが食事をするとき（L.A.の中心にある公園である）パーキング・スクエアの裏に隔離される必要はないと主張しました。1999年の「フード・ノット・ボムズ」（Food Not Bombs：爆弾ではなく食糧を）の活動では、ジェイムズ・ローソン牧師が、記者会見に出席して我々をメディアに紹介し、公民権に関する我々の立場を支持してくれました。彼はマーティン・ルーサー・キングが師と仰ぎ、「今日の世界でもっとも偉大な非暴力の理論家」の1人と呼んだ人です。ローソン牧師は、公園裏のホームレスの人々は、バスの後部座席のローザ・パークス²⁾のようだと教えてくださいました。それは、私の生涯で最も名誉あることでした。」

以上は私とデイビッドとの会話からの引用だが、これは彼が現代米国のホームレス問題を公民権にかかわる重大な問題と位置づけていることを示している。彼は文字通り公共空間をめぐる闘争している。彼の法的闘争は、ホームレスの人々が他の人々と同じように公共空間を利用する権利を主張することを意図したものである。彼の闘争の大半は、サンタモニカとベニス・ビーチのリゾートタウンで行われてきた。この2つの地域は、伝統的に自由奔放な雰囲気を持ち、特にサンタモニカにはかつて自由主義の地方政府が存在した³⁾。これらの要因と、暖かい気候および、物乞いに同情的な訪問者や彼らの支援に積極的なボランティア団体が多いことなどがあいまって、ベニスとサンタモニカはちょっとしたホームレスのメッカになっている。いわゆる「マグネット効果」の典型的な例として、ホームレスを助けようとする都市は、彼らに同情的でない都市のホームレスを引き付け、またそのような都市からホームレスが追い出されてくるので、ますます多くのホームレス人口を抱えることとなる。

サンタモニカのホームレスのなかにどの程度よそからの流入者がいるのかは、激しい論争的になっている。地元民とよそ者の定義はどうしようもなく曖昧である。しかし、2002年、市当局はホームレス人口が約1,000人（郡区の人口は85,000人だが、天気の良い週末には100万人にも膨れ上がる）に達したとし、ホームレス人口を抑えるべきであると判断した。郡区は2つの条例を通過させた。1つは夜間にダウンタウンのビジネス

街の戸口で座ったり寝たりすることを禁ずる条例、もう1つは公的な許可なく、ホームレスの人々に食事を提供することを禁ずる条例である。この急激な右傾化がきっかけとなって当局とホームレスの人々および彼らの支持者の間で一連の対立が起こり、その対立は今日まで続いている。米国社会で広がっている法律尊重主義を反映して、これらの闘いは路上ではなく主に法廷で行われている。

デイビッド自身は、ホームレス——この状態を、彼は好んで「ホーム・フリー」と表現することがある——のままでいるには知的すぎるという印象がある。しかし、彼に自分のホームレス状態は意図的なのかと聞くと、まったく違う意味で「意図的」だと言う。

「私が経験したホームレスとは、人類史上で類を見ないものです。歴史上で初めて、これまでにない意味で、意図的なのです。私たちホームレスの人間が自ら「選択して」ホームレスになっているという意味ではありません。それどころか、全くの逆です。私たちの人生で、「貧困」や「ホームレス」は、かつてとは全く別の意味を持つものになっています。今やそれは、政策立案者の意図的な政策の問題であるからです。私たちホームレスではなく、権力のある人々、現実に事態を変える力を持つ人々による政策の問題であるからです。」

(フィールド・ノート、2007年12月27日)

事実、デイビッドがホームレスでいる必要がないことはほとんど疑う余地がない。たとえば、彼は叔母から約6万ドルを相続しており、家のある暮らしに戻る足がかりを得るためにそれを使うこともできたのだが、彼はそのほとんどをホームレス支援運動に寄付した。この通り、彼がホームレスを続けているのにはイデオロギー的な要素があるのは明らかである。

デイビッドはサンタモニカ公営ホームレス用シェルター (SAMOSHEL) に入っていたが、近年は小さなテントに住んでいる。昼間、彼はこのテントを自転車に乗せて移動する。彼は大きな古いラップトップコンピュータを、木製の持ち運び用ケースに入れて持っている。ケースの外には、クッション代わりに灰色のじゅうたん地が敷かれている。彼はこのコンピュータを使い、無線インターネットでプレスリリースを発信する。ボランティアや慈善団体による食料の無料支給を受けることに対し、イデオロギー的な反対はしていないが、彼は主として大きなごみ箱から食べ物をあさって食べている。少なくとも、どのごみ箱をあさったらいいかわかっていれば、ごみ箱の食べ物は概して意外と良いものなのだと言っている。自分から嫌な臭いがしていると感じたときは謝るが、外見にはさほど気を遣っていない。デイビッドは物乞いをする人を決して非難することはないが、自分は物乞いをしない。そのかわり、彼はフェルトペンで厚紙に「MORE LOVE」と書き、それに紐をつけて作ったネックレスと引き換えにささやかな金を受け取っている。また、寄付も収入源になっているが、彼が自分からそれを要求することはない。このように、デイビッドは常に、ホームレスと中産階級の行動主義の狭間の難しい位置をうまく保っているのである。

5 リバプールの投爆教会での生活——マーク

英国の都市リバプールの路上に暮らすホームレスのほぼ全員を、私は直接知っているのではないと思う。その根拠は、最近の公式調査（2007年5月）で、この大きな工業都市の路上生活者は合計12名と発表されたのだが、この数は私が2004年と2006年にリバプールで現地調査を行った時に知り合ったホームレスの人数とほぼ同じだからである。英国政府は、この非常に少ない数の路上ホームレス——英国では一般的には「荒地で寝泊まりする人（rough sleepers）」と呼ばれる——の公表に気をよくしている。2007年、イングランド全体のホームレスの数は498人と公式に発表されており、うち半数はロンドンにいる。北東の都市ニューカッスルでは、2007年のホームレスの数はゼロとなっている⁹。ただし、これらの数字は、ある晩に路上で寝泊まりした人々についてのものであるから、上記の数字は実際よりも低めだということは明らかである。「昨年1年間で、少なくとも1晩路上で寝泊りした人々の数」という米国のような定義に変更すると、この数字は約10倍に増えると推定される。例えば、大手NPOの「ブロードウェイ」は最近、2006年から2007年までのロンドンだけで、その数は2,997人になると発表した¹⁰。それでも英国の路上ホームレスの数は、日本や米国よりもはるかに少なく、人々を路上生活から抜け出させるためのインフラもたくさんある。リバプールだけでも、ホームレスのための様々な居住施設が約80も取り揃えてある¹¹（写真6参照）。

このため、リバプールでどのような人が今も路上で寝泊まりしているのか、なおさら疑問がわく。この疑問に対して答えるための方法の1つは、聖ルカ教会でしばし過ごしてみることである。地元では「投爆教会」として知られる、この有名な歴史的建造物は、1941年、ドイツによるリバプール爆撃の際、焼夷弾の直撃を受けた。この19世紀の立派な教会は、手入れの行き届いた庭園に囲まれており、外側からは無傷に見える。しかし、この教会には屋根がなく外壁の中は空っぽである。広島原爆ドームのように、戦争の記念碑としてその状態のままに残されたのである。リバプールを訪問した時、私はこの教会がホームレスの活動の中心となっていることが分かった。そのうちの何名かは夜そこで寝泊まりしていて、リバプール周辺のシェルターよりもこの屋根のない教会の方を好んでいるようだった。

聖ルカ教会にいたホームレスたちのうちの1人がマークだった。彼は背が高く、たくましい体格をした30代の男性で、ハンサムだった。マークは、以下のような1日のスケジュールをきっちりと決めていた。1日の大半は、食べ物を得られるある場所から他の場所へと、リバプール中を歩き回ることに費やされる。

午前7:00 マウントプレザント・ミッション（伝道所）が開いて朝食（日曜日には8:30）。

- 8:30~3:30 ホワイトチャペル・プロジェクト（公共福祉センター）開館。「ディナー」（ランチ）が12:30に供される。（日曜日のディナーは、リバプール中央駅近くのアノバー通りにある別の場所に出される。）
- 4:30 シスターズ・オブ・マーシー（ローマカトリック教会の修道女）による「ティー」（実際には十分な食事）の提供。
- 5:30~8:30 ボルトン通りのベースメント・ナイト・ドロップインセンター開館。1人前10ペンス（約15円）で麺類を提供。
- 午後10:00~11:00 ライム・ストリート駅。もう1つのミッションがホットドッグとスープを提供。
- 午前4:00 「ケンタッキー・フライドチキン」の店主が売れ残りの商品の入った箱をホームレスの人々に提供。

上記のように、マークはホームレスの人々の支援施設を利用することや、施しを受けることを嫌ってはいなかった。彼が路上で寝泊まりする主な理由は、麻薬の常用薬があるためである。そのため彼はいくつかのシェルターから追い出され、他のシェルターでも規則に従って生活することができなかった。マークによれば、彼が若々しく見えるのは、コカインとヘロインの効果なのだそうである（同時にそれらによる破壊的な効果も強調しているが）。彼は16年間麻薬を常用してきたが、今はそれを減らしているという。「8週間前、麻薬を毎日やるのはやめた。今は時々しかやってない」。そう言って彼は、痙攣する肘の内側にある注射針の痕を私に見せた。針の痕は深かったが新しいものではなかった。

マークが路上生活から離れるのは、刑務所で服役する時である。彼は10回刑務所に入ったことがあるという。そのうちの何回かは、自分の乱れた生活から抜け出すのに必死で、わざと逮捕されるように振舞ったからだ。この点デイビッドの話と一致する。）刑務所に入れば屋根はあるし、毎回の食事やベッドがあるし、麻薬の使用を強制的に絶つことができる。彼は長年にわたって、路上生活と刑務所生活を周期的に繰り返すという人生を送ってきた。しかし2002年12月、マークが刑務所に入っていたとき、彼の15年来のガールフレンドが心臓のバイパス手術中に亡くなった。「彼女は12月18日に亡くなり、12月23日に埋葬した……。それからずっと、僕はホームレスだ。」

ガールフレンドの死に対する悲しみは深く、また彼女との間の娘（今は結婚してリバプールの近くの町アパートルに住んでいる）のことも気に病むあまり、マークは今日のような暮らしをするようになってしまった。マークによれば、娘は彼がホームレスであることをうすうす感づいているようだが、彼自身は決してそのことをはっきり告げたことはない。彼は、ホワイトチャペル・センターのシャワーを利用し、衣類を頻繁に着替えることによって清潔さを保っている。衣類はごみ箱からとても良いものが手に入るのだ

と言う。これも、デイビッドの話を思い出させる。マークは娘に毎日電話をしており、時々彼女と会っていると言う（写真7参照）。

マークにとって、授爆教会は文字通り聖域である。屋根がないので雨はしのげないが、それでもその壁は、教会で眠るホームレスを風や通行人の好奇の目から守ってくれる。彼がこの教会に愛着を持っていることは明らかである。警察は定期的に教会の外側をパトカーで巡回し、時々ホームレスの行動についてメガホンで警告したが、私が教会にいた間は決して教会の中まで入ってくることはなかった。そこにいたホームレスたちによれば、通常、自分たちは教会の中で放置されていて、少なくとも警察が手出ししてくることはないとのことだった。米国であれば、公共の場所での飲酒が容易に警察の介入を招くことになるが、英国では日本と同様、その程度のことは違法ではない。聖ルカ教会やオックスフォードのボン・スクエアなどでも、人々が缶や瓶の酒を飲んでいるのをよく見かける。警察が介入するのは、けんかが起きた時や人々が怒鳴り合いを始めた場合だけである。

しかし、この教会のスペースを利用したい者は他にもいる。それはリバプールのスラングで「スカリー (Scally)」と呼ばれている町の不良たちで、彼らはよくホームレスたちをいじめにやってくる。ある時、私がマークや他のホームレス数人と一緒に授爆教会の庭に座っていると、2人のスカリーが、高い壁の上から私たちに小便をかけてきた。次に彼らは袋いっぱい腐った生ごみを私たちに投げつけて、笑いながら逃げて行った。これなどは小さな事件だが、リバプールの路上にはどこでも暴力的な雰囲気がある。私はロサンゼルスのスラム街にいた時よりも緊張していた。

ほとんど毎晩、この授爆教会の壁の中で、ホームレスの人々の小さな集団が座って酒を飲み、煙草を吸っていた。リバプールの路上よりもそこの方がより安全に感じられた。

6 日本のホームレス居住地——空間をめぐる集団闘争

本稿の最後の2つの項目では、個人から集団に話題を移し、ホームレスの人々の居住地やコロニーによるスペース争いについて検討したい。日本の多くのホームレスは、公園や河川敷のテントや小屋に集団で住んでいる。このような住み方をしている人々を、英語の「homeless」という用語に当てはめるのは難しい。英語の homeless は、「路上ホームレス」(street homeless, 英国では rough sleepers) と「シェルターに住んでいるホームレス」(sheltered homeless) の2つに区別される。しかし日本で上述のような小屋に住んでいる人々は、正確には、通常概念での路上やシェルターに住んでいるとは言えない。彼らの住居の多くは手作りで、非常にうまく建てられている。大半は小さな住居だが、小さなアパートに匹敵するほど大きなものもある。家具を備えていたり、番犬や猫を飼っていたりする場合もある。彼らの多くがガスコンロを使っているし、近くの消火栓

から取水したり、噴水式水道の水を飲んだりしている人もいる。少数だが、車のバッテリーから電気を得ている人もいる。そして電気を供給するためにソーラーパネルを付けたホームレスの住居についての記録が、少なくとも1件ある¹²⁾。

日本のホームレスの住居設計は非常に高い関心を集めている。例えば、アートや写真による展覧会が何度か開かれており、写真やスケッチ、文章を集めた本が少なくとも4冊は出版されている。曾木幹太の『ASAKUSA STYLE 浅草ホームレスたちの不思議な居住空間』(2003)、坂口恭平の『0円ハウス』¹³⁾ (2004)、『TOKYO 0円ハウス 0円生活』(2008)、長嶋千聡の『ダンボールハウス』(2005)といった本がそれである。これらはすべて、そのような住居を建設、維持、装飾し、そこに住む家主たちの知恵と技能を十分に証明するものとなっている。例えば長嶋は、少なくとも10の異なる建築のテンプレート——小屋型、テント型、小屋+テント型、平伏寝袋型、キャンピングカー型、ロープ型、ツーバイフォー型、樹木などの自然物の周囲を利用する構造体型、所持品を利用する構造体型、「無セキツイ」型——を識別している¹⁴⁾。彼の詳細なスケッチと分析は、建築関係の雑誌で特集されている。それらの住居の設計技術に感嘆するとともに、その家庭的な雰囲気にも感心させられる。私はかなりの数の住居の中に入ったことがあるが、室内の様子は、それこそ一般の家のように、塵一つなくきれいな場合から、荒れ放題な場合までと様々である。ホームレスの住居は、その家主の個性を忠実に反映している。彼らの住居が多数、村落のようなコミュニティに建てられているのを見ると、「homeless」という言葉がどの程度そういった人々のことを正確に描写できるのか考えさせられる(写真8参照)。

女性のいない、そして現金をほとんど所持しない生活をしていると、小屋の住民たちは、日本男性の大半が長い間失っている技術を習得することが必要になる。多くの男性がサンドイッチも作れないような社会に暮らしながら、ホームレスの男性は自分で料理する方法を学ばねばならない。また彼らは、自分の生活スペースを作り、維持し、修繕し、家具などを取り付けなければならない。そういったことは、一般の男性なら専門家に金を払ってやってもらうものである。したがって、彼らは収入や所持品がほとんどなく、時には食料の無料支給を待つ人の列に加わるにもかかわらず、ある意味では、多数派である一般の男性よりも自立しているとも言える。

これらのほぼ男性だけの居留地のような社会とはどういうものなのだろうか。それは非常に多様だが、ある種のコミュニティ構造のようなものが見受けられることがある。私が知る限りでそれが最も組織化されているのは、大阪の西成公園であろう。この公園にはホームレス居住地が20年前から存在している。そこには通常の共同体ならば町内会館と呼ばれそうなコミュニティの集会所があって、彼らの間では「団結小屋」と呼ばれている。その名の示すとおりに、ここではある種の男くさい左翼の倫理が広がっており、その雰囲気は主に近くにある日雇い労働者の町、釜ヶ崎からくる。正式な指導者はいな

いが代表者はいて、例えば沖縄出身のベテラン日雇い労働者で過激論者のイトウは、よく警察や地方自治体との交渉をまとめる役目をしている。それから英雄もいる——たとえばカクさんと呼ばれていた男性は、けんかつ早いがこの集落の新参者には寛容で頼りにされる男だった。2007年の夏、彼は不可解な状況で死んでしまったが、団結小屋には、頭の傷に包帯をしてあごひげを畜えた彼の顔写真が額に入れて飾られ、その傍らで線香がたかかれていた。

多くの居住地でここまで組織化が進んでいるかどうかは疑問であるが、それらが規則を持ち、誰に対しても開かれているわけではないのは確かである。西成公園の近郊にある、大阪の木津川沿いの工業地では、川に沿って建ち並ぶ100戸ほどの小屋のうち、約3分の1は実際には空き家であるとのことだった。高レベルの組織が存在していて、空き家は外観が保たれており、それは将来の住民のために、自治体による小屋の撤去やスペースの閉鎖を防ぐ対策であった。先住者の招きによってのみ、新しい住民が入居できるという暗黙の取り決めがある。自分の住んでいる住居を建てた住民は少ないだろうと考えられる——多くの住民は空いている住居を引き継いだか、もしくは現金を払うか友情のよしみで、自分より高い建築技術を持った人に住居を立ててもらったと言われた。

これらの住居に対する自治体の態度は曖昧で変わりやすい。河川敷の場合には、自治体は通常見て見ぬふりをしてきた¹⁹。公園のコミュニティも黙認される場合がある。東京の新宿中央公園のホームレスの住居には、郵便物の配達までされていて、ますますホームレスと一般の人々との区別が分かりにくくなっている。

しかし近年では、市当局はだんだんと公園のコミュニティに対して反対の立場に転じてきた。実際、ホームレス政策では常に、公共空間利用の「適正化」について言及されてきた。ホームレス自立支援法の第11条は、「適正な利用が妨げられている」場合、公園の管理局がホームレスの人々の住居を撤去することを認めている。このため、飴と鞭を使ってホームレスを追い出そうとする地方自治体とホームレスの間での複雑ないたちごっこが繰り返されている。

特に大阪と名古屋では、一般的に、大きな公園にプレハブの一時避難所を設置し、ホームレスの人々に彼らの小屋やテントから出てシェルターに住むよう奨励するという対策が取られてきた。その代償に彼らの住居は撤去・破壊され、新しく住居を建てることも認められない。シェルターは2、3年後には解体されることになっており、その時点でそこに残っている住民がどうなるのかについては明らかにされていない。実際問題として、シェルターに入った人々のうち、通常の仕事に就いたり普通の住居に移ったりできる者の数は少なく、それよりはるかに多くの人々がシェルターを出る際、生活保護申請の承認を得てついに福祉の世話を受けるようになるか、あるいは、ホームレスに逆戻りするかのどちらかである。後者の場合の多くは、公園のコミュニティの住人ではな

く路上のホームレスとなる。自治体は、24時間見張りをし、柵や障壁を入念に張り巡らせ、住居の建設を禁じる看板を立てて、誰かが公園に新しい住居を建てようとするのをあらゆる手段を講じて阻止している（写真9参照）。

上記のような方法を取ったおかげで、自治体は公園内のホームレスたちの数を徐々に減らすことに成功した。大阪でみると、長居公園ではホームレスの住居がすべて撤去された。大阪城公園では、650戸あった住居が数年間で40戸に減少した。当局に対する頑強な抵抗活動の本拠地である西成公園でさえ、ピーク時には400戸あった住居が約100戸にまで減った。曾木や坂口、長嶋が称賛した、工夫を凝らした手作りの住居を見つけるのは徐々に困難になってきている¹⁶。皮肉なことだが、自分自身の家建て缶の収集でつましい生活を送る男性は、ほぼ間違いなく自立の手本であるといえる。いったん彼らがシェルターのシステムに入れられたら、国家福祉を利用（生活保護を受給）することになるか、公園のコミュニティから追い出されて段ボールハウスでの生活を送ることになり、もっと絶望的なホームレス状態に陥るかのどちらかだろう。したがって、「自立支援」策は、彼らの自主性を奪ってしまう結果にもなり得る。2007年4月6日の厚生労働省の発表によれば、シェルターに入っていないホームレスの人数は4年前の25,296人から26.6%減少して18,564人となり、公園の居住地をめぐる消耗戦の効果が良く反映されている。立ち退かされた男性の中には、まだホームレスのままの人がいると思われるが、集結して人目を引くようなことは避けているようである。

7 日本と米国の排除の事例

今日までで、日本でもっとも有名なホームレスの大量排除の事例は、おそらく1996年1月の事件であろう。当時の東京都知事であった青島幸男は、約30名のホームレスに対し、新宿駅西口近くの地下道から立ち退くように命じた。そこでは、段ボール生活をしてきた人が100人以上もいたが、そのほとんどがこの強制退去の前に移動しており、その多くは、自治体が受け入れ施設として代わりに提供した大田区にあるプレハブの寄宿舍に向かった。警察が強制撤去のために到着した時、彼らの前に約200名の人々が立ちはだかった。彼らの多くは、退去に抵抗する人々を支援しようと東京の他の場所から集まってきた活動家たちだった¹⁷。この事件は、新宿連絡会（1997）と笠井（1999）によって活動家の視点から記録されている。また、この運動がホームレスの人々とどのような関係があるかという問題については、マリナス（2004）の短期的な研究と長谷川（2006）の長期にわたる研究がある。

しかしここでは、このホームレス居住地に残った少数派の人々が、シェルター提供の申し出を拒否し、強い風の吹く不快な駅のコンコースに住む権利を守るために警察と戦ったという事実焦点を絞りたいと思う。この、長谷川が「空間の維持」（Hasegawa

2006: 118) と呼ぶところの主張は、大田区のシェルター利用を受け入れた人に対して長期的に居住してよいという保証がなかったこと、およびその1年ほど前に大田区のシェルターで2名の男性が死亡したことを考えれば、より合理的であると言えよう。しかし、2年後の1998年2月10日、コンコースに広がった火災により、4名のホームレス男性が死亡したことを考えると、そこが理想的な住処とは到底言えないことを思い知らされる。この火災は1996年の強制退去よりもはるかに悲劇的な事件であったことはまず間違いないが、笠井も長谷川もこの火事については詳しく言及していない¹⁰。笠井はこの火災で4名の男性が焼死したことにすら触れず、火災の後、それを機会にホームレスの人々は退去することを当局と合意したと述べるにとどまっている。笠井はかつて、抵抗運動が勝利を収めたと主張したが、私の考えでは、この火災は、その主張に長い影を落としていると思う。

新宿駅の火災はまた、1996年の強制退去の後、多くのホームレスが、新宿駅——前とは少し違う場所にはあるが——へと戻ってきていたことを気付かせるものでもあった。なわばり争いは、敗者がその場から追い出されたからといって、必ずしも終わりになるわけではない。彼らは、その前の1994年の新宿駅強制退去の後もそうしたように、そして日本のホームレスがある場所から追い出された後にしばしばそうするように、元いた場所へ帰ることがある。上野公園や隅田川の土手では、この行為はすっかり定着していて、ホームレスは自分たちの住居や所有物を、毎月の決まった日に定期的に移動させ、自治体はその「人の住んでいない」場所を写真に収めるとすぐ、その日のうちに元に戻している。これは、ホームレスと自治体とのある種の共謀であり、ホームレス側は本来なら余分で必要のない不便を少しだけ我慢し、自治体側は法律の条文だけが尊重されるという状況に暗黙の同意をするのである。

新宿駅のコンコースには、動く歩道という障害物が設置され、人が横になるスペースを塞ぐように「パブリックアート」が置かれ、以前よりも生活しにくくなったにも関わらず、相当数のホームレスたちが戻ってきていたということは注目に値する。事実、2007年の春、深夜に新宿駅を訪れた時、私は数十人の男性がコンコースを寝場所にしているのを見た。ただ、朝になると彼らは段ボール箱を持ち去っていた（共同生活をしていた時は、段ボール箱は常にそこに置かれていて、中には地元の画家が絵を描いて装飾を施したものもあった）。

こうしたことから、少なくとも数名のホームレスの人々はこの場所に強い愛着を持ち、自分のなわばりを守ろうとする意思を持っていることは明らかである。他にも、ホームレス男性の中核グループが、公共空間からの退去を求める政府の命令に抵抗を続ける事例があり、このような抵抗が名古屋や大阪の大きな公園での行政代執行につながったのである。こうした事例においては、ホームレスたちが利用できるようにシェルター（プレハブの仮施設設で、長期的な展望が不明なものではあるが）が準備されてい

るのだが、圧倒的な政府の権力にもひるまず、自分のテントや小屋を守ることを選ぶ人もいる——それはすでに前述のホトケの事例に見たとおりである。

このような状況は、スペースをめぐる闘いを劇的に表現している。日本のホームレス強制退去劇は、何度も報道され非難の対象となったが、それらはごく一部の事例に過ぎないことを忘れてはならない。もっと多くの場合において、日本の対応にはある特徴が見られる。それは、他国ではめったに見られないほど自治体側が忍耐するということと、長く住み続けることによってある種の権利が発生するという認識があることである。しかも、公園や河川敷に長期にわたって住んでいるホームレスの人を退去させるのは、最近そこに住み始めた人を退去させるよりもはるかに大きな問題であると考えられている。この意味で、日本のホームレスの人々に対する態度は、賃貸住宅に住んでいる人々に対するそれに類似している。日本では貸借人の権利が非常に強いが、それは年月が経つにつれてさらに強まっていく。たとえば、貸借期間が満了になり家主がその更新を忘れてしまった場合、貸借人の退去が免れないであろう英国や米国とは異なり、貸借人は特に期限を切らずにそこに住み続ける権利があるとみなされる。

こうした考え方の影響もあり、いくつかのホームレス居住地は非常に長く存続することになった。特に、大阪の西成区の野宿地は、今なお20年も続いている。2000年11月にプレハブのシェルターが設置されたが、それは3年後に閉鎖され、公園内には100戸を優に超える手作りの住居が残った。私がこれを書いている時点でも、それらの住居は残存している。しかし、今では西成公園は都市公園というよりもむしろ軍事基地のように見える。ホームレスと一般市民の領域を区分し、残っている小屋やテントを徐々に囲い込むために、有刺鉄線を張った金網フェンスが多数設置されたからである。この政策は、抑圧的寛容の事例だと言っていいだろう（写真10参照）。

米国にはホームレスの野宿地の長い歴史があり、様々な地方自治体による対応の仕方、そしてホームレスによる自治政府と地方自治体による管理との間の均衡を図るための様々な方法について検討するのは非常に興味深い。ロサンゼルススの有名な事例はドームビレッジというものである。私はそこを2度訪問したのだが、ドームビレッジは独特の野営地で、イグルーに似た白いドームの中にホームレスの人々が住んでいた。そこにはテッド・ヘイズ (Ted Hayes) というカリスマ的指導者がいた。彼は黒人のラストファリアンで、「モーゼ」と自称する癖があった。1993年、彼は石油会社のアトランティック・リッチフィールド (ARCO) を説き伏せて25万ドルを提供させ (米国の慈善活動ではとんでもない連合ができることがある)、その資金をドームの購入・建築とロサンゼルス中心部にある土地の賃借料の支払いに充てた。地元の好意的な地主によって地代は非常に安く設定され、ヘイズは20のドームを設置することができた。各ドームは、高さ約3メートル、直径6メートルである。ドームビレッジの入口近くの鉄条網には「JUSTICEVILLE, U.S.A. (正義の町, 米国)」と書かれた木の看板が掲げられていた。へ

イズのコミュニティはホームレスのためのシェルターの代わりとなるものとして機能していた。家族は一緒に滞在することができ（米国のシェルターでは珍しい）、動物をペットとして飼うことも許可されており、飲酒や弱い麻薬の使用も黙認されていた。このヒッピー的な雰囲気にもかかわらず、ドームビレッジは政府の補助金を獲得することに成功し、徐々にロサンゼルス福祉システムの中に組み込まれつつあった。しかし、この社会の関心を集めたドームビレッジは、変わり者のヘイズが、共和党に入党したことを発表した時、突如として終わりを告げた。この議論を醸すスタンドプレーは、生粋の民主党員だった地主を狼狽させた。地主は地代の大幅な値上げをし、2006年にドームビレッジは閉鎖に追い込まれた（写真11参照）。

もっと最近では、ジャック・タファリ（Jack Tafari、英国生まれの白人のラスタファリアン）¹⁹ という名のもう1人のカリスマ的指導者が、オレゴン州ポートランドに、「尊厳の村（Dignity Village）」と呼ばれるホームレスの村をつくった。この運動は、2000年12月、公共の場所での野宿を禁ずる市の条例に対し、タファリと7人の仲間が反抗したことに始まる。その次の1年間で、彼らのキャンプ地は徐々に拡大していった。それは警察の手入れを受けて5度も閉鎖されたが、その度に彼らは他の場所にまたキャンプを立てた。ついに、市当局はそれを6番目の場所——「空き堆肥置き場」——に残すことを許可した。その場所は今でも残っているが、テントは急ごしらえの小屋へと徐々に姿を変えてきている。村のホームページによると、「寄贈されたバスを図書館として利用し、風車で発電し、村人は自分の手で有機野菜を栽培している。村は自治制で、麻薬とアルコールは禁止である。この村は自他に対する愛と尊敬の原則のもとにつくられている」とある。

私は尊厳の村にはまだ行ったことがないので、その光り輝くビジョンがどの程度正確なのかはわからない。ここでは、このような非公式な野宿地が政府の承認を得るときは、常に微妙なバランスを取る必要が出てきて、法的認可や、場合によっては財政的援助を得ると引き換えに、ある程度の自治を手放さねばならないことが多いという点を指摘するにとどめる。たとえばシアトル市では、長年にわたり、あるテント村が法的認可を求めて戦い、2002年にはついに限定的ではあるが法的承認を勝ち取った。このテント村は12年の間に30回場所を移動している。運営しているのは「シェア・ホイール」（SHARE / WHEEL）というNPOである。テント村を維持するための法的根拠は認められたものの、その恒久的な設置を認められた場所はないため、不規則に間隔をおいて今でも場所を移動し続けている。その上、法的地位の承認を得ることは、すなわち市の規制の対象となることも意味する。たとえば、健康と衛生に関する法律により、シアトルのテント村で食事を作ることが違法となり、キャンプ地であるのにキャンプファイアで料理することが禁止されるという、奇妙な事態が起きている（写真12参照）。

カリフォルニア州オンタリオ市のあるホームレスのキャンプ地では、私はその最後の

1週間に立ち会った。このキャンプ地は設置されて1年も存続しなかったが、当時広く報道されていた。オンタリオはサンバーナディーノ郡にあり、ロサンゼルスから約60マイル内陸部に位置する中都市である。オンタリオとその周辺の町ではホームレス対策が非常に不十分であり、その結果、2007年の夏には路上ホームレスの人口は約140人にのぼった。米国の他の多くの都市同様、ホームレスの人々は頻繁に警察から嫌がらせを受け、些細な罪で逮捕されていた。こうしたなかで、進歩的な考えを持つ2人の警察官が、ホームレスの人々に、ある場所にテントを張る許可を与えるという対策を提案した。その場所は、オンタリオ国際空港（ロサンゼルス国際空港に次ぐ、ロサンゼルス周辺で2番目に大きな空港）に隣接し、カリフォルニアを走る貨物列車用の2つの鉄道線路に挟まれた土地の一面にあった。騒音と公害にまみれた埃っぽいこの荒地は、都市計画局が居住地として不適であると公式に宣言していた場所だった。提供された設備は6つのキャンプ用トイレ（後に12に増やされた）、生ゴミ用のバケツ2個、冷水の出るシャワー1つだけだった。それにもかかわらず、そこはこの地域の多くのホームレスが利用できる最も魅力的な場所となり、彼らの数は徐々に増え、2008年3月には約400人に達した。

この時点で、オンタリオ市当局は慌てふためいた。オンタリオ市には、近くの他の都市からホームレスの人々が集まってきているようだった。さらには米国の他の地域からも集まってきているのではないかとよく言われていた。（実際は、州外から来た人の数は非常に少なかった。）これはマグネット効果の典型的な事例であると思われたため、市当局はこの対策として、突然、地元民でない者は全員、1週間前の通告をもって退去させると発表した。その週、市当局はこのキャンプ地に机を設置して、誰を「地元民」として認めるかを見極めるため、キャンプ地の住民に面談を行った。どのような状況でも、誰が地元民で誰がよそ者であるかという質問は、複雑なものになりやすい。カリフォルニアでは、人々が非常に頻繁に引っ越しをする傾向があるため、なお厄介である。市当局は、地元民として認定されるための4つの基準を発表した。その基準は、(1) オンタリオの学校に通ったことが証明できる、(2) オンタリオに近親者が住んでいることが証明できる、(3) オンタリオにある不動産をかつて所有あるいは借りたことが証明できる、(4) 警察に個人的に知られている、の4つである。このうち少なくとも1つの基準を満たしていると警察に認められたキャンプの住民には、青いリストバンドが渡される（病院で使用されているリストバンドと同様のもので、装着後は切らなければ外すことができない）。基準を満たせなかった者には、白いリストバンドが渡される。彼らは1週間以内にキャンプを出ていかねばならないが、自分の行きたい都市までの交通手段が提供される。これを当局は‘sending them home’（「家への送還」）と言っているが、彼らのほとんどは、他の都市にも帰る家はない。地元民と認定される可能性があるが、さらなる証拠の提出が必要な者には、オレンジ色のリストバンドが渡され、その週のうち

に再面談が行われることになった。

もちろんこのシステムは議論的になった。たとえば、オンタリオの学校に通った年数、親類の人数、あるいは在住時期や期間についての明確な定義がない点で、認定基準は非常に曖昧である。また、皮肉なことに、法に触れるような問題をよく起こしていた者は「警察に知られている」ので、地元民と認定されてキャンプに留まることを許可されるが、問題を起こさなかった者は警察に知られていないので、退去を命じられる可能性が高くなってしまう。リストバンドについては、このシステムをヒトラー時代のドイツで、ユダヤ人やジプシーや同性愛者に対して発行された、色分けされたバッジになぞらえる人が多かった。(しかし、1人の若い女性のキャンプ住民は、このリストバンドを見て、ナイトクラブで使われていたリストバンドを思い出したと言っていたことを言い添えておく。それは入場料を支払った人に再入場を許可するための印だった。)(写真13参照)

非地元民を退去させた後は、オンタリオ市の計画では、大幅に強化した規制のもとでのキャンプの再出発に焦点が当てられていた。キャンプ地の周囲に高いフェンスをめぐらせ、1つだけゲートを設置し、市で選定したNPOからの監視人を常時駐在させ、午後10時から午前6時までの厳しい外出禁止令を敷いた。キャンプ周囲のフェンスは様々に理解された。市当局はそれを、麻薬ディーラーやギャングなどから「弱者」であるホームレスの人々を保護するために必要であるとして正当化していた。しかし、多くのホームレスはそれを、キャンプ地を刑務所のようなものにするための権威主義の道具に過ぎないと考えていた。

ラジオのレポーター：フェンスが設置されれば、ここが良くなると思いますか？

キャンプ住民：もちろんさ。きっとずっと良くなるだろうよ。ナチス・ドイツの第13捕虜収容所みたいにね。役人たちはこれを全部ブルドーザーで取り壊して、強制収容所をつくりなす。 (フィールド・ノート、2008年3月21日)

この状況は、日本の公園からの強制退去との興味深い対照をなしている。この米国の都市は、内部と外部の人々の識別に過剰ともいえる関心（これは日本人論の文献では、しばしば「日本人に典型的」と表現される類の関心である）を示している。大阪、名古屋、東京の自治体は、ホームレス居住地に対する対応は様々でも、地元民と地元外の人間を区別するということはしてこなかった。そのかわり、その地での居住期間を最も明らかな識別の原則としていた——つまり、新しく移り住んできた者よりも、長期にわたって居住していた者に対してより寛容的であった。また、オンタリオ市当局は、キャンプの住民に対し、日本のどの自治体よりもはるかに強い度合いの規制をしようとしていた(写真14参照)。

オンタリオの強制退去に対する抵抗は抑え込まれた。多くのキャンプの住民は、発表

がなされて間もなく去って行った。尋問を受けたり正式な退去を言い渡されたりするのを恐れて、また認可手続きの開始日に見た重装備の警察の姿に怖気づいて、彼らは追い立てられる前に自分から出て行ったのである。より意志の強い「非地元民」の中には、近郊の都市ボモーナから来た3名のベトナム戦争の退役軍人がいた。彼らが軍隊にいたのは、彼らの生涯でわずか数年間だけだったが、それは彼らのアイデンティティに強い影響を及ぼしていた。彼らのリーダーは好んで軍帽をかぶり、また軍服の他のアイテムを愛用することもあった。彼らはまた、軍隊で学んだサバイバル技術に大きな誇りを持っていた。退役軍人たちはキャンプに救急治療テントを設置し、キャンプの住民たちに自立と相互援助について力説した。彼らは、退役軍人省や市の自治体も含め、権力に対して非常に懐疑的だった。その一方で、彼らの軍人としてのアイデンティティは、命令に従うことでもあったので、キャンプの住民が非暴力の抵抗を提案した時は、それをあざ笑った。彼らの場合、最終的には、この命令を「遵守」という本能がまさった。頑健なサバイバル技術は、権力との対峙ではなく路上でホームレス生活をすることで生かされることになった。退去の日（2008年3月24日）、彼らのリーダーはテントの前でたなびいていた赤十字の旗をおろし、肩にそれを担いで歩き去った。彼の忠犬がその後に従っていった（写真15参照）。

最終的には、当局の取った巧みな作戦のおかげもあって、退去はかなり順調に進んだ。退去当日には、非地元民の全員を逮捕するのではなく、フェンスで囲まれた新しいキャンプ地のエリアとされた現地の中心部を、ブルドーザーでならすことになっていた。その中心部のエリアを出て他の場所へ移動した者は、新しいキャンプ地が建設されるまでの少なくとも1、2週間は咎めを受けることはない。つまり、大勢のメディアがこのテント村に詰めかけるこの重要な日には、逮捕は起こらなかった。退去しなかった非地元民は、後日、報道陣の注目のないところでひっそりと処分を受けた。

結 論

ハーシュマンはその模範的な分析で、あるコミュニティの構成員が問題に対処する方法として退去、意見表明、忠誠（exit, voice, loyalty）を析出したが（Hirschman 1970）、スノーとマルケイヒはこれを一部修正して、ホームレスの人々が地方自治体とのスペース争いに取りうるる4つの異なる戦略、すなわち退去、意見表明、適応、固執（exit, voice, adaptation, persistence）について概説した（Snow and Mulcahy 2001: 165）。本稿においては、これら4つの対応のすべてが事例に見られる。河川敷に住んでいるツジモトとヨシダは、ホームレスが議論的となり警察が目を光らせている中心的な地域を出て、より人の少ない場所へ移動することで、敵対的な都会環境に適応してきた。腐敗した現代社会に対するヨシダの非難を、非公式で私的な状況においてのみではあるが、私は

「意見表明」の戦略の事例であると考える。彼の行動は退去と適応を示唆するものだが、彼の語りは数多くの異論を表現している。ホトケは固執と意見表明で対応している事例である。彼は拘置所に入れられるまで白川公園に住み続けることに固執し、法廷でその犯罪容疑をめぐって闘い、権威に対する批判を表現する劇場として法廷を利用した。デイビッドはセミプロな活動家で、彼もまた固執と意見表明を組み合わせた事例である。そしてマークは適応の事例である。彼は麻薬の問題に対処し、また地域の福祉政策を利用し、生命を維持するための資源を得るべく、自分のライフスタイルを適応させている。

ホームレスの居住地は、集団として上記のどの戦略を選択するかに迫られる。日本では、西成公園の居住地の長期的な存続に見られるように、固執の戦略が成功することがあるが、米国では、同じ戦略が居住地の閉鎖を招く傾向がある。一方、適応と意見表明に関しては、ポートランドとシアトルのテント村の事例のように、警察の取り締まりに対応して何度も場所を変え、自分たちが迫害されていることを声高に世間に訴えている。オンタリオでは、市当局がテント村の住民を2つのグループに分類し、「非地元民」は全員強制撤去させ、「地元民」には新しい、監獄のような状況に適応することを強いた。

本稿では、日本、あるいは比較検討を目的として選んだ2つの国におけるホームレスのなかでも、必ずしも典型的・代表的であるとは限らない個人や状況に、意図的に焦点を当てている。多くのホームレスにとっては、退去と適応だけが、現実的な選択肢である。彼らは期限が来ればシェルターを出て、また別のシェルターを探し、入所と退所を繰り返しながら人生を過ごす。これは米国ではあまりによく知られた現象で、「回転ドア」と呼ばれている。地方自治体が条例を変更すれば、ホームレスの人々は、自分たちが経験する嫌がらせを最小限にするために、自分たちの行動を適応させるか、あるいはもっと寛容な環境へと去っていく。抵抗をしても、控え目の消極的な抵抗しか現実的な対応方法はない。

それにもかかわらず、例えばホトケやデイビッドの事例、そして日米両国における公園や河川敷の居住地で見られる団結——その度合いは様々だが——などのような、積極的な抵抗の事例は、ホームレスの人々が、単なるいじめられ役ではないことを気付かせてくれる。ずっと以前、米国のエリート社会学者のグループが、ホームレスの人々についての百科事典の定義を発表したが、そこには次のような一節がある。

「ホームレスの人々は、貧しく、アノミー的で、無気力、かつ無責任である。彼らは資産を持たず、尊敬も集めず、相互義務の負担も負わない。彼らに通常の意味での社会的行動を取ることとはほとんど不可能である。組織的な地位や役割を持たないので、彼らの活動範囲は、わずかな規模での個人的な生活必需品の調達域を出ない。(Caplow, Bahr and Sternberg 1968: 494)

ホームレスの人々が、どのような様式でどの程度、路上のスペース確保のために戦うのかは、それぞれの性格や社会状況、文化的背景によって大きく異なるが、本論文が上述の定義の誤りや不当性の論証に資するものであることを望む。(3名ものエリート社会学者が集まって、どうして1つの段落でこれほど多くの誤謬や侮辱的な所見を書けたのか、理解に苦しむ。) ホームレスの人々にとって、社会的行動を取ることは十分可能であり、少なくとも現代社会の資産の一部は入手でき、彼らの活動範囲は個人的な生活必需品の調達域を優に超えている。ホームレス居住地で、一連の地位や職業的な役割が観察される場合も多い。しかも、これらは新しい現象ではない。権力に対する抵抗は、まぎれもなく、カブローらが上記の記述をした1960年代のホームレス生活の特徴であった。しかし、現在ではホームレスの人々の数はかつてよりもはるかに増えているのであって、彼らの多くに関しては新保守主義的な権力に対する抵抗を実行することは必要な生き残り戦略になっている。

注

- 1) 皮肉なことに、小屋やテントを持たない人々は、シェルターの利用を認められない。これは、公園からホームレスの住居を一掃するというシェルター側の目的を反映した政策である。
- 2) 若宮大通公園は、名古屋中心部を走る高速道路の高架下に、3、4キロに渡って伸びている細長い公園である。この公園の両サイドと上には交通量の多い道路があり、市民がくつろぐ場所としては他の2つの公園ほど望ましくない。恐らくこれが、未だにこの公園だけにホームレスたちが住み続けている理由だろう。
- 3) 2007年8月、東京と川崎の間の多摩川の堤防が台風により決壊し、28人のホームレス男性がヘリコプターで救助された。
- 4) 多くのホームレスの人々が姓を名乗ることを避け、また他の人に対しても姓や個人的なことを詳しく訪ねるようなことはしない。バタリ(2008)は、上野公園の情報提供者がこれを「ホームレスのエチケット」と表現していたことを引用している。私は、釜ヶ崎の公園の小さな居住地に住んでいたホームレスたちが、彼らが良い友人だと思っていた男性が亡くなった時、彼についての情報を何も警察に伝えることができず、彼の家族に連絡するのに役立てなかったことを恥じていたのを知っている。
- 5) いくつか例外がある。近年続々と発行されたホームレス関連の書籍の中に、「洞窟オジさん」(加村2004)という題名の本がある。この本は、子どもの時、虐待する両親の元から逃げ出して40年間洞窟で暮らし、狩りをしたり果実などを採取したりして命をつないだという男性の話である。この本には狩りの技術に関する図解付きのアドバイスが含まれている。力強い自立の物語は、日本では常に人気がある。第二次世界大戦の終結後、何十年間も太平洋の島のジャングルに残って暮らした兵士の自叙伝や物語は、よく売れ続けている。
- 6) 大阪城公園の大きな小屋に住むヒラヤマからは、私は反対の意見を聞いた。彼によれば、ホームレスたちが抵抗しなければ、男子生徒たちは彼らに対する興味を失い、いじめを止めるという。
- 7) 1950年代の米国公民権運動の象徴的人物。1955年、アラバマの公営バスで彼女が白人に席を譲る事を拒否して逮捕された事が公民権運動の始まるきっかけとなった。

- 8) これら2つの地域は互いに隣接しているが、厳密に言えば、ベニスとはロサンゼルス市の一部で、サンタモニカはロサンゼルス郡の独立した郡区である。このため、サンタモニカはベニスよりもより自治の性格が強い。
- 9) この段落のデータはすべて下記のアドレスより引用している。<http://www.communities.gov.uk/housing/homelessness/publicationsabout/homelessness/roughsleepingstatistics/>
- 10) <http://www.broadwaylondon.org/broadwayvoice/S2HAnnual0607.pdf>
- 11) Shelter Young Persons' Team, *Merseyside Accommodation Directory*, 2004 年版。
- 12) 曾木 (2003: 19), 坂口 (2004: 182-183)。
- 13) 坂口が撮影したホームレスの住宅の写真の一部は、彼のホームページに記載されている。
http://www.0yenhouse.com/en/Zero_Yen_House/
- 14) 少なくとももう1つの異なるタイプがある。その居住区域は、柵で囲まれた比較的大きな場所、様々な小屋、テント、日よけが内部のシェルターになっている。
- 15) この例外は、東京の隅田川である。比較的中心的な位置にあり、川の両側には眺めの良い散歩道や自転車道があるため、この川辺の居住地は官僚にとって大きな課題となっている。
- 16) 多くの国では、このような都市公園のオルターナティブ住宅の文化の繁栄は決して許されないだろう。その存在は、日本の官僚の寛容な側面を示すものである。
- 17) 笠井 (1999) は、警察がホームレス強制退去のために到着したとき、そこには200人のホームレスたちがいたと言っている。しかし私は、活動家とホームレスの人々の比率は、ほぼ本文に記述したとおりだと考えている。
- 18) 笠井 (1999: 361, 365), 長谷川 (2006: 121)。
- 19) タフアリとヘイズとの類似点は顕著である。タフアリもまた、彼のパンフレットにあるように、モーゼのイメージを使っている。彼のパンフレットの1つからの抜粋を以下に記す。「我々は当面の間、荒野の中でさまようかも知れない。しかし、昼のあとに夜が来るように必ずや、いつか我々は乳と蜜の流れる豊かな土地にたどり着けるであろう。」

文 献

- Caplow, T., H. M. Bahr and D. Sternberg
1968 Homelessness. In David Sills (ed.) *International Encyclopedia of the Social Sciences*, pp. 494-499. New York: Macmillan.
- Hasegawa, M.
2006 *We Are Not Garbage! The Homeless Movement in Tokyo, 1994-2002*. New York and London: Routledge.
- Hirschman, A.
1970 *Exit, Voice, and Loyalty: Responses to Decline in Firms, Organizations, and States*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 加村一馬
2004 『洞窟オジさん——荒野の43年』東京：小学館。
- 笠井和明
1999 『新宿ホームレス奮闘記——立ち退けど消え去らず』東京：現代企画室。
- Koschmann, J. V.
1996 *Revolution and Subjectivity in Postwar Japan*. Chicago: University of Chicago Press.

Malinas, D.

- 2004 Voices From The Underground: Homeless People's Social Movements in Japan, the 1994–1996 Shinjuku Case Study. *Annals of Sociological Association*, pp. 43–50. Osaka City University.

長嶋千聡

- 2005 「ダンボールハウス」東京：ポプラ社。

大山史朗

- 2000 「山谷崖っぶち日記」東京：TBSブリタニカ。

Oyama, S.

- 2005 *A Man with No Talents: Memoirs of a Tokyo Day Labourer*, translated by Edward Fowler. Ithaca and London: Cornell University Press.

Patari, J.

- 2008 *The 'Homeless Etiquette': Social Interaction and Behavior Among the Homeless Living in Taito Ward, Tokyo*. Saarbrücken, Germany: VDM Verlag.

坂口恭平

- 2004 「0円ハウス」東京：リトルモア。

- 2008 「TOKYO 0円ハウス 0円生活」東京：大和書房。

新宿連絡会

- 1997 「新宿段ボール村 闘いの記録」東京：現代企画室。

Snow, D. A. and M. Mulcahy

- 2001 Space, Politics, and the Survival Strategies of the Homeless. *American Behavioral Scientist* 45(1): 149–169.

曾木幹太

- 2003 「ASAKUSA STYLE」東京：文藝春秋。

妻木進吾

- 2003 「野宿生活——「社会生活の拒否」という選択肢」『ソシオロジ』147: 21–37。

Tsumaki, S.

- 2004 Preference for Homelessness Categorized as “Refusing a Decent Civic Life”: A Critical Perspective. *Annals of the Sociological Association*, pp. 21–28. Osaka City University.